

5-2 京焼の匣鉢についての研究ノート

木村茉莉

はじめに

「匣鉢」^{さやばち}は、やきものを美しく焼成するためには無くてはならないものである。雅やかな京焼も、国宝に指定されるような天目茶碗も、この匣鉢なしには存在し得なかったといっても過言ではない。主に本焼焼成で使用され、登り窯の強烈な炎や灰などから製品を保護する役割を果たすとともに、積み重ねて多量の製品を窯詰めするために重要な道具である。また、匣鉢には製品が熔着していることが多く、どのような製品をどのように焼成していたかを判別することができる重要な資料である。

本稿では京都の発掘調査にて出土した江戸期から明治期の匣鉢と、現在も五条坂の藤平陶芸株式会社に保存されている昭和の匣鉢を比較検討し、匣鉢がどのように変化していくのか概観したいと思う。まず、江戸時代の尾形乾山窯出土の匣鉢からみてみよう。

I 鳴滝乾山窯

鳴滝乾山窯跡は、法蔵寺鳴滝乾山窯跡発掘調査団によって2000年から2004年まで5年に渡り発掘調査が行われた。乾山焼について学術的な発掘調査が行われたのはこれが初めてであり、窯業史のみならず美術史の分野からも注目を集めた。窯体の検出には至らなかったが、窯壁・輪トチン・足付円盤形トチン・ピン・より土・匣鉢・匣鉢蓋・未製品・陶磁器片などが大量に出土した。18世紀初頭における京焼の技術を知ることが出来る重要な調査となった。

鳴滝乾山窯で使用されていた匣鉢はロクロ成形で円形平底のタイプ（第1図1～16）と角形（17）がある。すべて破片であるためすべての器形を判別することは難しいが、楕円形の匣鉢と思われるものもある。円形のものには、底部回転糸切り痕と静止糸切り痕が見られるものがある。角形の匣鉢はロクロ成形ののち、角を曲げて作られており、角には指押さえの痕跡が認められる。

匣鉢の器表面はほとんどの個体に緋色状の変色が認められるが、高火度焼成を繰り返し受けたと思われるものは少ない。自然釉の熔着が顕著に認められる匣鉢は数が少ない。窯内の場所によって炎の受け方が異なることを示している。匣鉢の見込み（底部内面）に高台が熔着している例もあるが、ほとんどは熔着痕跡を残さない。しかし、輪トチンが直接置かれたような輪状に変色していない例も確認される。おそらく、製品を匣鉢に直置きすることは少なく、輪トチンなどを下敷きにして詰められたと考えられる。

グラフでは口径の大小問わずに器高は6cmのものが多いという結果となった（第8図グラフ1）。またここでは匣鉢積みの為のより土が大量に出土しているし、匣鉢の口縁部と底部に積み重ねた熔着痕が明確であることから、ほぼ同じ径の匣鉢を積み重ねたことは確かだが、グラフでは口径と底径が比例せず大きくばらついている（グラフ2）。口縁部の厚みは0.5

cmから1cmと薄く（グラフ4）、製品に近いような胎土である事から、焼け歪みが激しかった可能性も否定できない。そのため、口径に規格があったかどうか判断することは難しい。

窯道具の中には明確なI字形トチン（李朝・九州系）や棚板積みに使用されるような遺物（タナイタやツクなど）は確認できない。典型的なタナイタの出現は江戸時代後期以降であるから出土していないのは当然だが、鳴滝乾山窯跡とほぼ時期的に近い大阪市堂島蔵屋敷窯跡では特殊なツクが出土しており、タナイタ積みの初現はこの頃から始まった可能性もあるが、鳴滝乾山窯では現在のところ、確認できていない。また、底部が突出した円形匣鉢も出土していない。瀬戸・美濃では既に出現している形態だが、それは鳴滝乾山窯では導入されていなかったようだ。仁清窯跡の採集品のなかにも確認されていないことから、京都では瀬戸・美濃の技術が全て受け入れられていたとは言い難い。

II 成勝寺跡（幕末・明治）

1995年、京都勸業館及び伝統産業館の建替えの際に伴い京都市埋蔵文化財研究所によって発掘調査が行われ、コンテナ数200箱を超える匣鉢をはじめとする窯道具が出土した。この調査では攪乱として遺物を取り上げられているため確定が難しいが、時代は幕末～明治頃の遺物であると考えられている。ここでは円形匣鉢（第2図-1）・角形匣鉢（3）・小判型匣鉢（4）が確認されている。グラフでは7cmから17cmまでの器高を持つものがあるが15cmにピークが見られ（第9図-1）、口縁部の厚みは最も多いものでも1.6cmあり、ほとんどが2cm台である（グラフ2）。

匣鉢はタタラ成形かと想定されるものを含んでいる。底部の粘土板の上に巻き付けるようにして円形や角形の匣鉢を成形していた可能性がある。胎土は固く焼き締まり、黒みのある赤褐色で鉄分を多く含んだ土である。

この地点から出土した匣鉢は、陶磁器説図に紹介されている明治初期の匣鉢とサイズや器形が一致し、幕末から明治の資料であることを裏付ける資料となっている。さらにここで興味深いのが、匣鉢の体部に見られる印である。「いせ又」・「一忠」などをヘラで線描きしたものや、「錦光山」と鉄釉で筆描きされたものなどがあり（第2図-1）、窯印と窯元が結びつけば年代の特定も可能になる可能性がある。

ここで見られる熔着痕跡については、製品の口縁部が匣鉢の底部外面に熔着しているものや、匣鉢同士が熔着しているものがある。ほとんど全ての匣鉢内面に製品の台痕は認められるが白泥の痕跡のみである。この白泥は現在使用されているアルミナに類似する熔着防止剤である。匣鉢の口縁部にも厚く塗られている例が多い。

III 六波羅政庁跡（明治～現代か）

京都国立博物館の仮設収蔵庫が建設に伴い2000年に発掘調査が行われ、小さな谷に投棄された多量の製品や窯道具類が出土した。立地としては五条坂に近く、ここで見られる匣鉢も五条坂関連のものである可能性が高い。山中に築かれた窯場であれば近辺に物原（捨て

場)を形成するだろうが、五条坂周辺では周辺に廃棄していたようであり、これらの出土遺物もそのようにして運び込まれたと想定される。

第3図では、大小様々な匣鉢が見られるが、小型の匣鉢(1)にはぐい飲みと思われる製品を一点だけ詰めた熔着資料が確認された。大型の匣鉢(12)には小物を数点入れるという方法も確認された。小物を窯詰めする際には、小さな匣鉢に一個だけ入れる場合もあれば、大きな匣鉢に数個入れる場合もあったようだ。

その他には、口縁部に半円状の空気穴をもつもの(7・8)、底部突出型の円形匣鉢(10)、窯印をもつもの(1・8・11)、さらに器壁を大きく切り取って窓をつけたもの(9)も確認した。この匣鉢は注ぎ口が出張った土瓶を入れるための工夫だと想定される。なお、瀬戸では茶入れなどの器表面に登り窯特有の自然釉をわざとつけるため、17世紀後半から窓をつけた匣鉢を使用していた(瀬戸市埋蔵文化財センター1995)。

グラフ1では、口径が大きくなっても器高には特に変化が見られない。グラフ2では口径と底径が比例しているがややばらついていることが分かる。口縁部の厚みは、0.5cm台のものが最も多く、その次が2cm代のものである(グラフ3)。

ここでは大小2種類の匣鉢が主に使用されていたのかもしれないが、資料数が少ないため明確ではない。ここで見られる匣鉢の胎土は、赤白く信楽によく見られる長石が熔け出した痕跡が目立つ。また口縁部には白泥を塗り、より土を置いている。

製品の熔着痕跡は今まで述べた中で最も多く、磁器・陶器ともに製品がそのまま熔着し、なかには小皿が平らにへたっているものもある。匣鉢同士の熔着も確認される。

IV 有限会社藤平陶芸(昭和40年代まで使用)

藤平陶芸では昭和40年代に公害防止条例によって使用できなくなった登り窯と匣鉢が今もほぼ往時の状態のまま保存されている。匣鉢は登り窯の中や周辺に高く積み上げられて今でも窯詰めされるのを待っているかのようなようである。何度か焼成を受け、自然釉が付着しているものや素焼き状のままのものなど様々だ。散逸したものも多いが、今も2400個以上の匣鉢が積み上げられている。

その中からすべての器種を網羅しようと考えてピックアップして図化したものが第4図から第7図である。大量に積み上げられた状態のなかから選んだため、全器種を網羅できたとはいえないが、かなりの種類を網羅できたと考えている。実測図からは種類や大小が実に様々であることが見て取れるだろう。ポピュラーな形としては円形平底の匣鉢である(第4図・第7図1~4)。また、円形匣鉢には底部が突出しているものも多く見られる(第5図)。ほかに、角形匣鉢(第6図)や変形匣鉢(第7図-5)も使用されている。第5図の底部突出形匣鉢は、まだ大窯段階であった16世紀後半の美濃地方ですでに使用されていた形で、美濃では当時、天目茶碗の焼成に使われていたと考えられている(多治見市教育委員会1987)。このタイプのものは京都では幕末~江戸時代初めにならないと確認できない。

藤平陶芸の匣鉢をグラフ化したものが第11図で、口径の大小に関係なく5cmから20cm

代までの器高を持つものが使われていたことが分かる（グラフ 1）。また、口径と底径は比例し、安定して匣鉢を積み上げられるようになってきている（グラフ 3）。口縁部の厚みは、薄いものもあるが 2 cm 近くあるものもある（グラフ 4）。

聞き取り調査によると、藤平陶芸の匣鉢は信楽で作られたものを購入していたという。ロクロ成形で外面にロクロ襷を強く残すものと、プレス成形のものがある。強度を高めるためにシャモットや割れた匣鉢を細かく砕き胎土に混ぜ込むこともあったという。

製品の窯詰めの際には匣鉢を重ねた時にそれぞれを離れやすくするためにアルミナの白泥を塗り、間により土（粘土紐）をかませて積み上げていた。より土の使用は御室仁清窯や鳴滝乾山窯と同じであり、瀬戸の 16 世紀以降の窯詰め方法とも同じである。

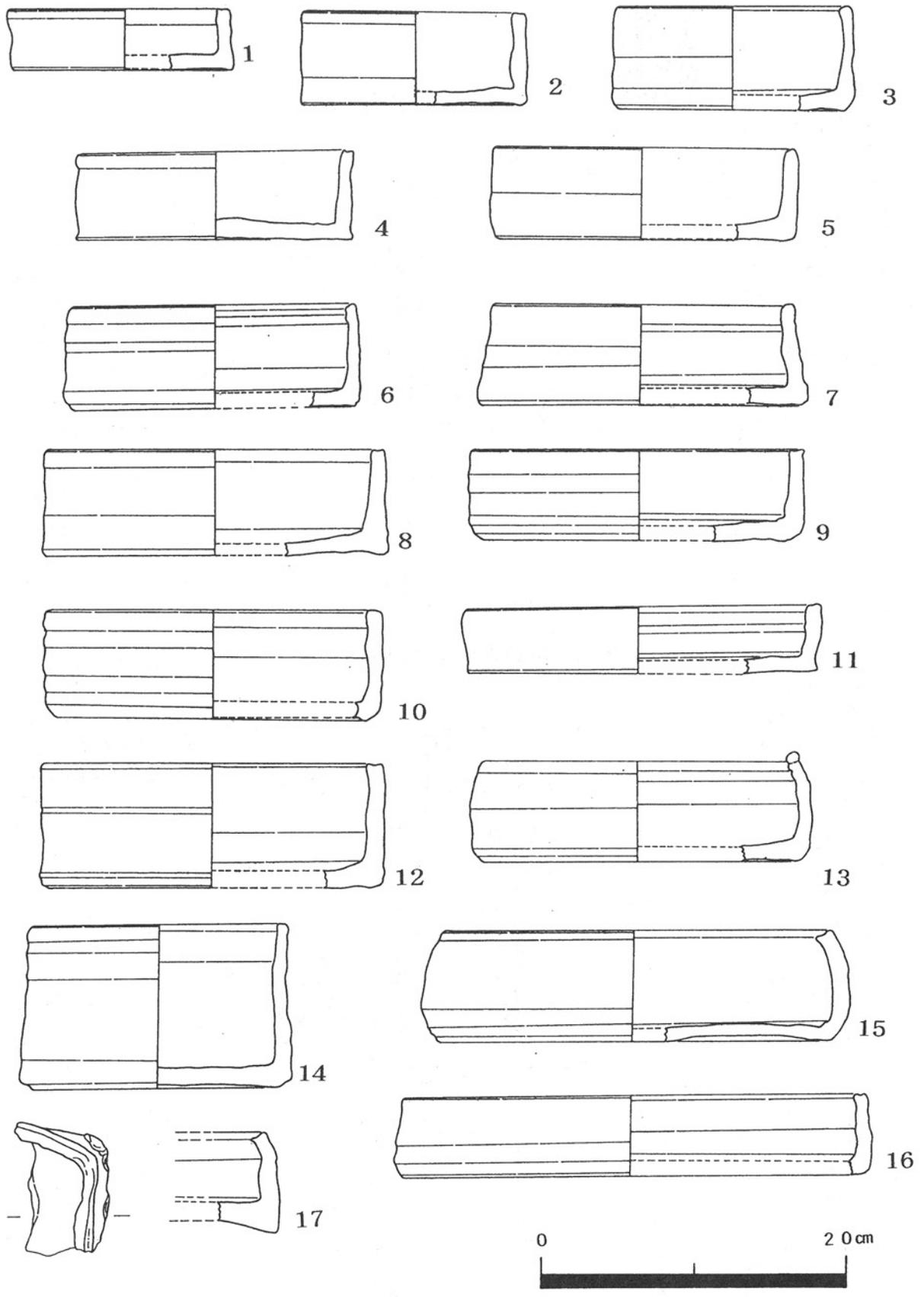
ここでの特徴として、製品の熔着痕跡がほとんどみられないことがあげられる。匣鉢内部に少量の釉薬が熔着しているものはあるが、焼けひずんだ匣鉢すら見られない。これは、製品が熔着してしまった匣鉢は即廃棄されてしまうためであろう。

まとめ

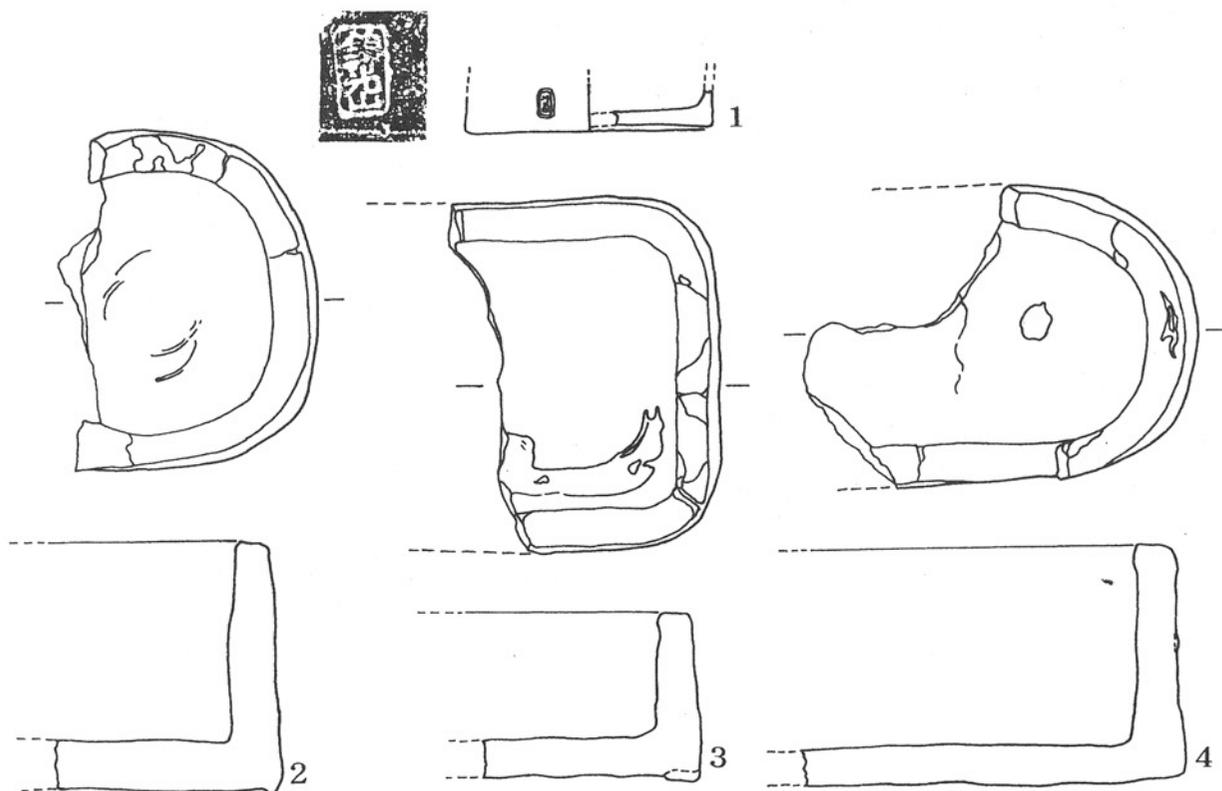
江戸時代の鳴滝乾山窯の匣鉢と現代の匣鉢は、サイズ・成型方法・胎土の点で全く異なるが、多くの種類のものを使用するという点では共通性がある。また、鳴滝乾山窯から時代が新しくなるにつれて、口径と底径が徐々に一致するようになり、口縁部の歪みが減っている事が分かる。口縁部の厚みは、1 cm 代のものから 2 cm を超えるものへ移り、再び 1 cm 代へ戻っている。それは器高にも言えることで、グラフを並べてみるともっとも厚い時期は明治期だったと考えて良いだろう。この時代の匣鉢が最も厚い理由は、現在のような耐火粘土が開発されていなかったことが大きな原因だったと考えられるが、現代よりも窯がフル作動し、量産や磁器生産も本格化し始める頃であったため、器壁が厚くなければ焼成に耐えられなかった可能性もある。

今回紹介した現代の窯は藤平陶芸のみである。この窯は現代の窯の中でも特殊な窯であるし、近・現代の京都の匣鉢の全てを網羅できたわけではない。このレポートで京都の匣鉢を全て網羅したとは全く思わないが、未報告のまま眠っていた資料を報告することができた。ほんの少しであるが、謎であると言われている「京焼」の一部を見ることが出来たと思う。

最後になったが、資料調査に際して有限会社藤平陶芸株式会社と財団法人京都市埋蔵文化財研究所のお世話になった。記して感謝の意を表したい。

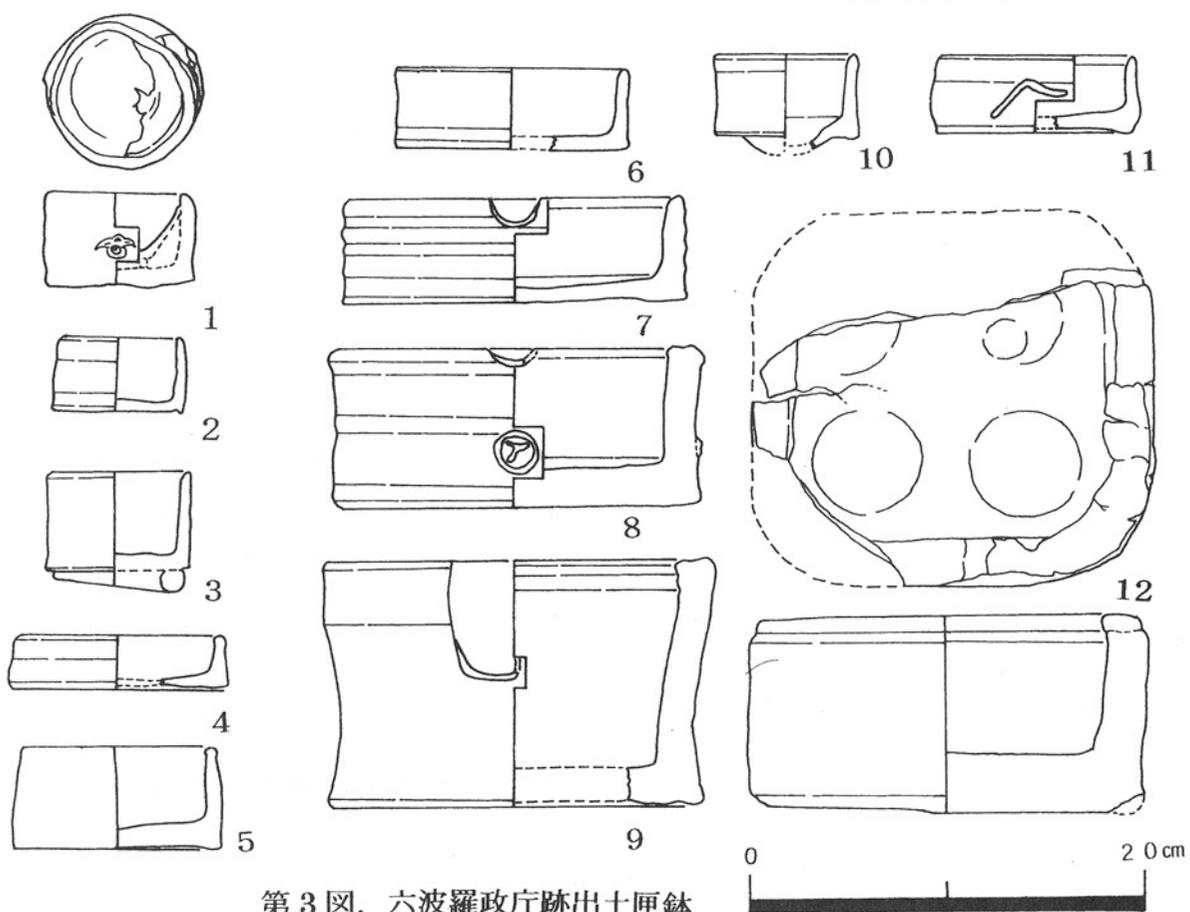


第1図. 鳴滝乾山窯出土匣鉢

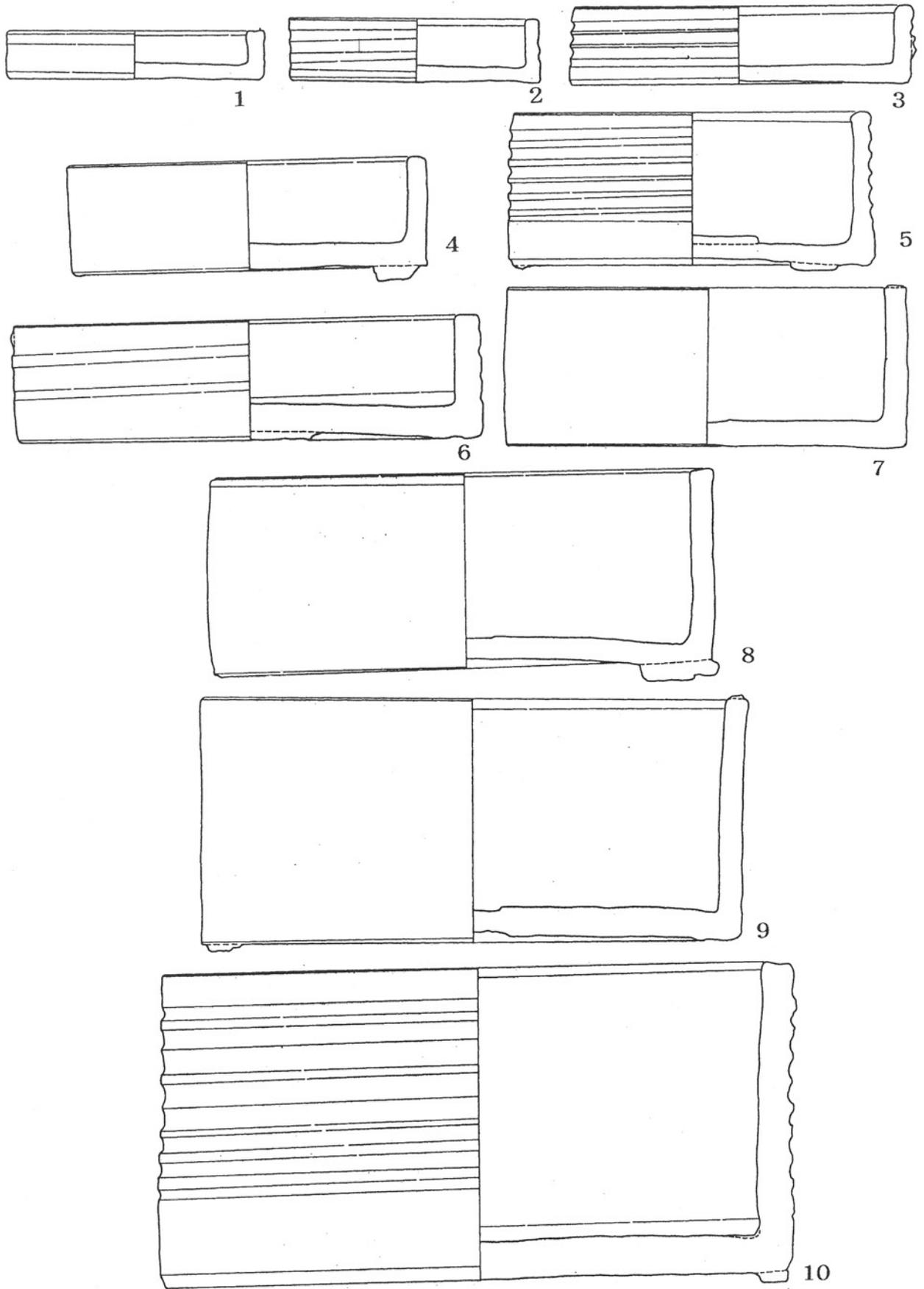


第2図. 成勝寺跡出土匣鉢

※複写ご遠慮下さい

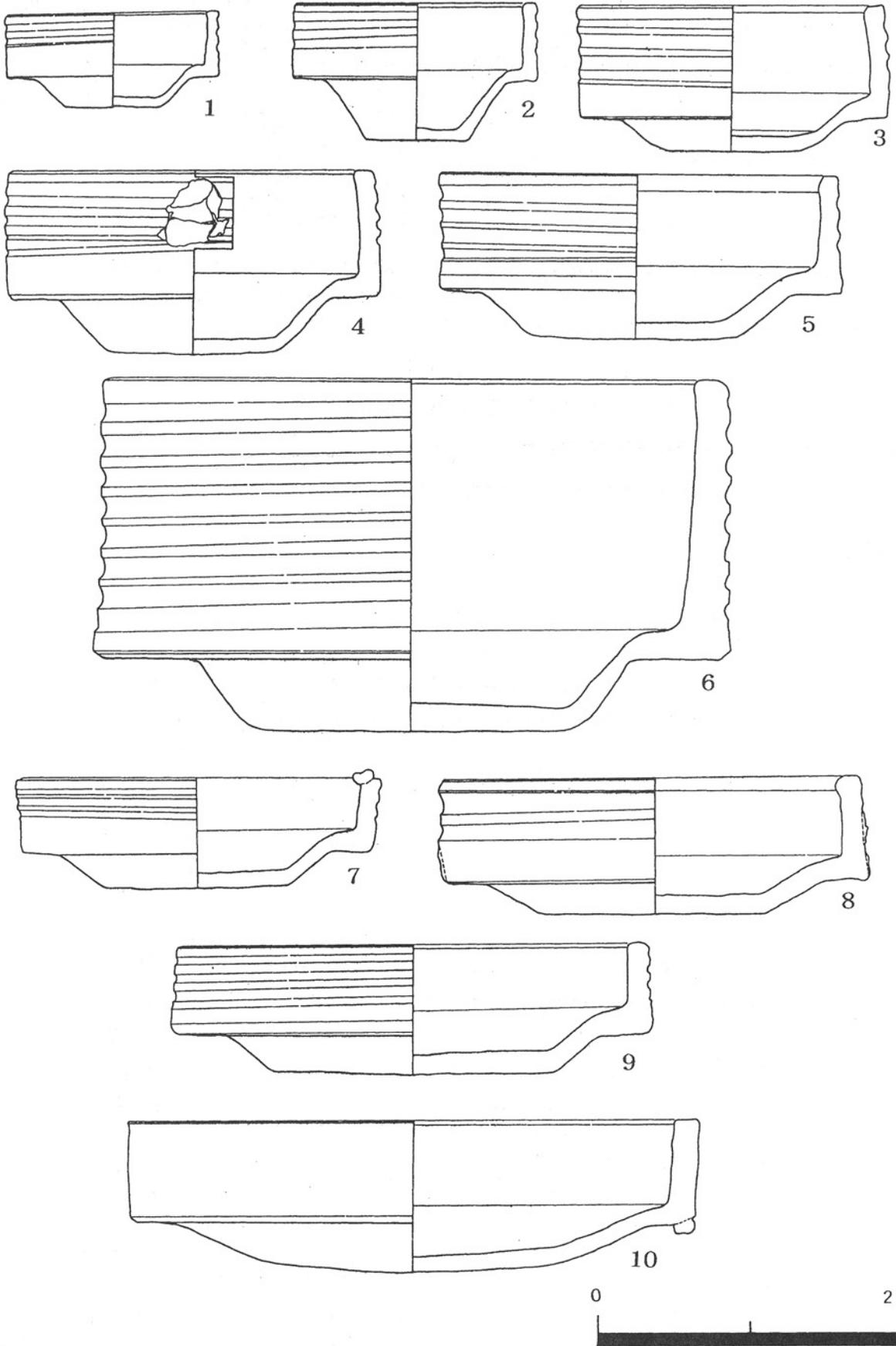


第3図. 六波羅政庁跡出土匣鉢

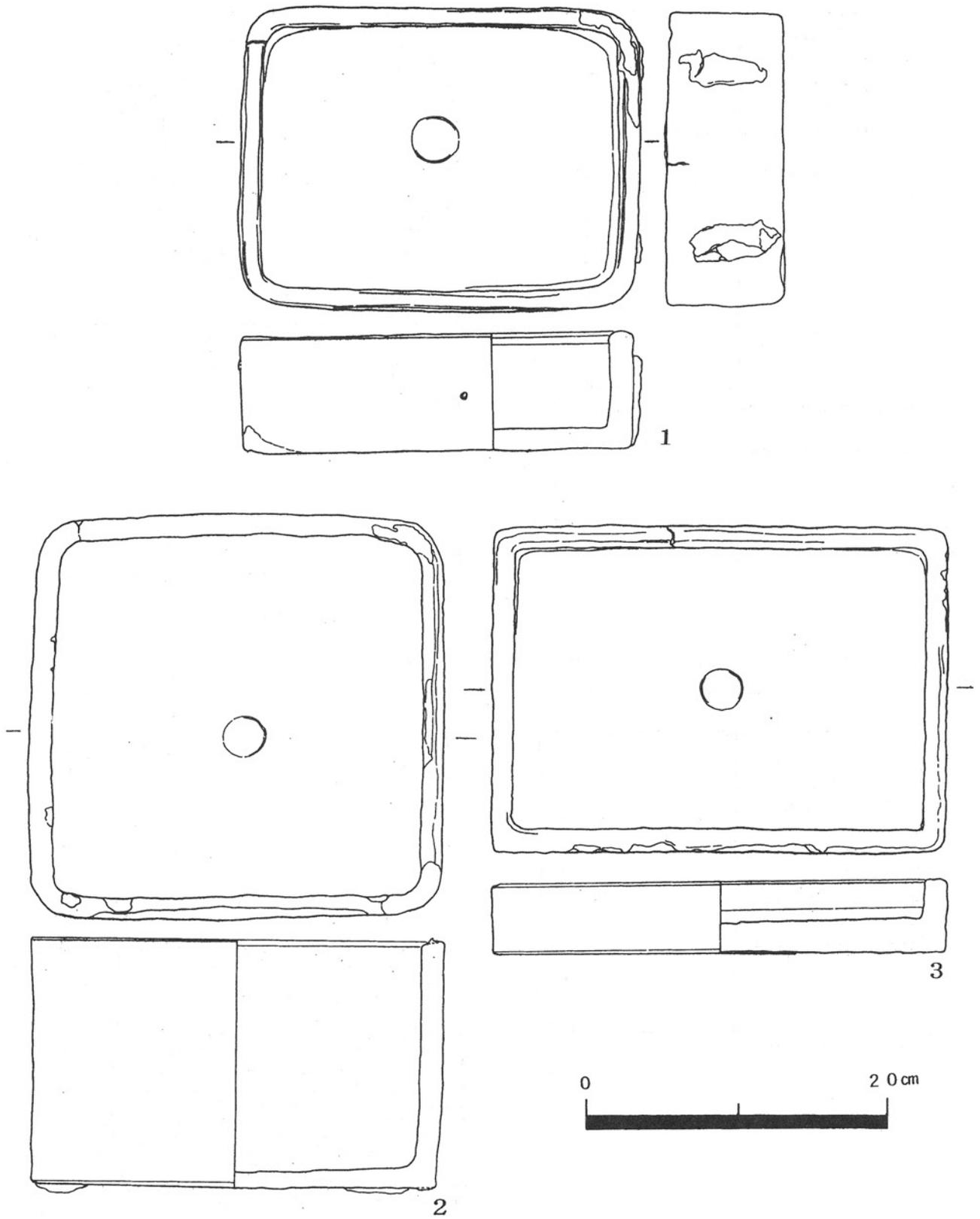


第4図. 藤平陶芸匣鉢

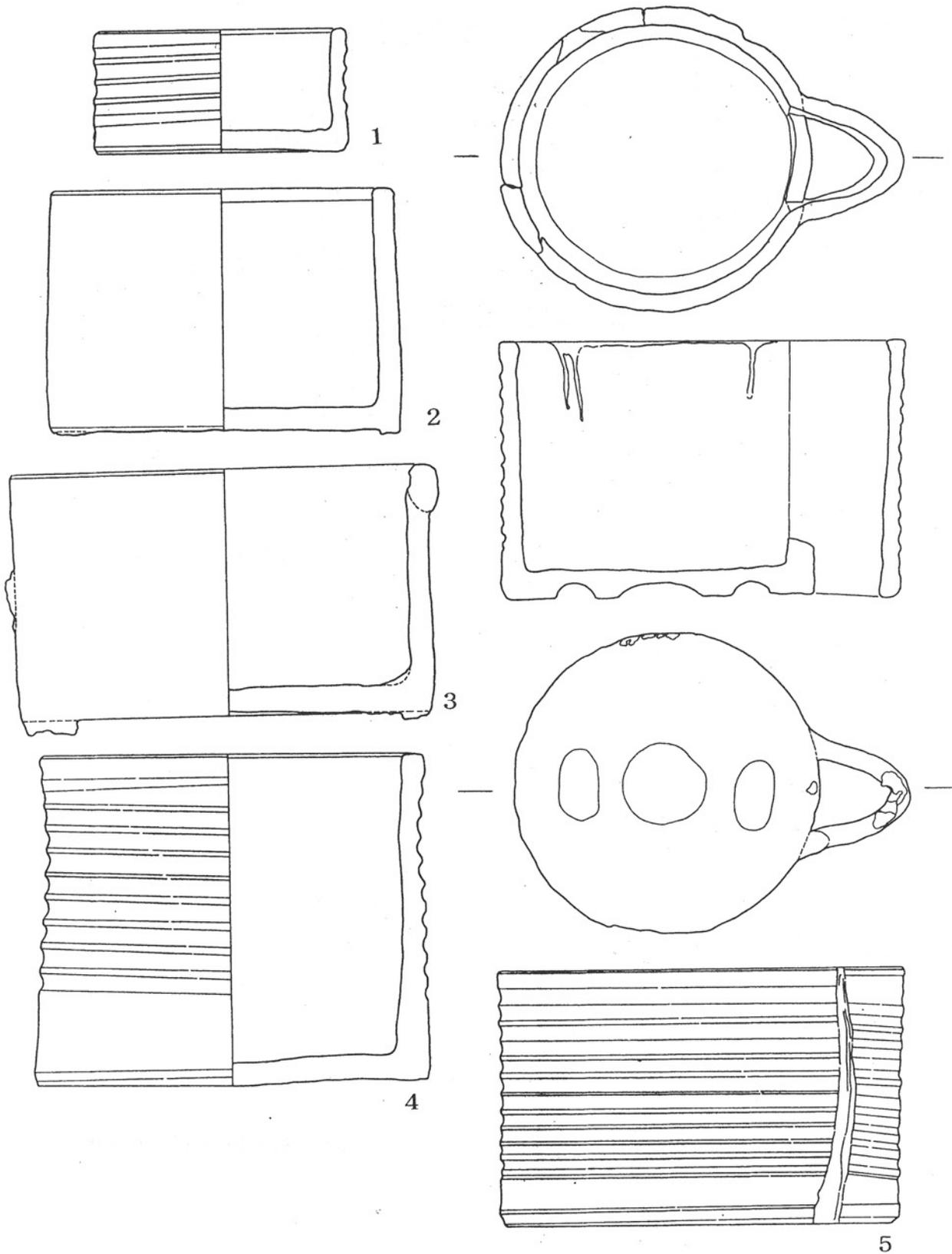




第5図. 藤平陶芸匣鉢

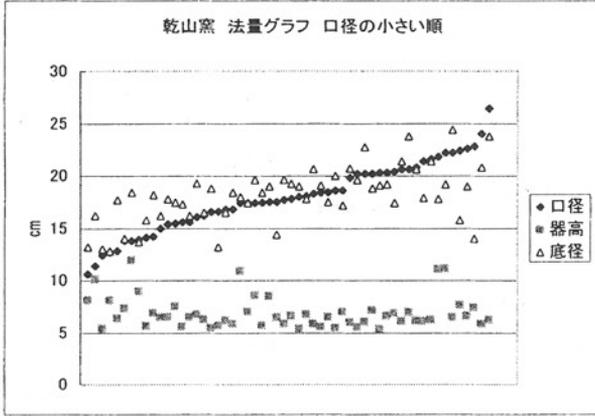


第6図. 藤平陶芸匣鉢

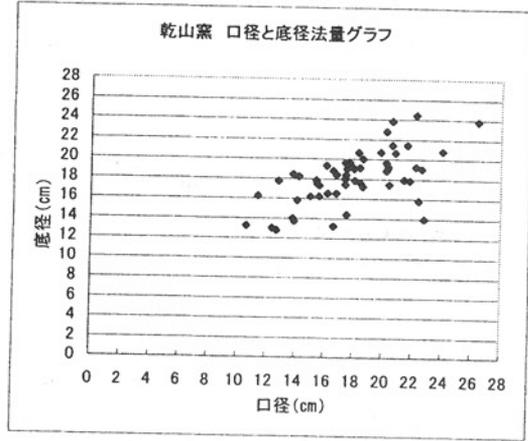


第7図. 藤平陶芸匣鉢

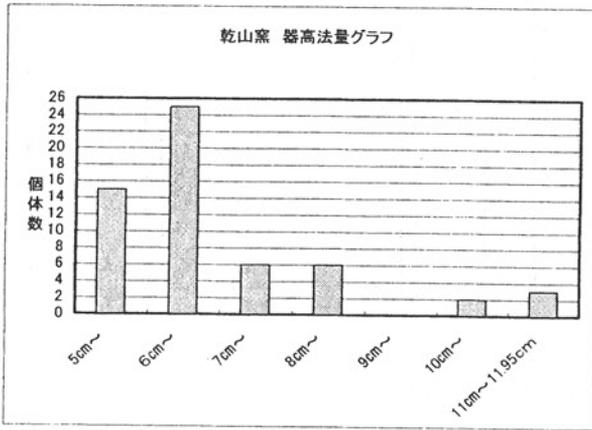
グラフ1



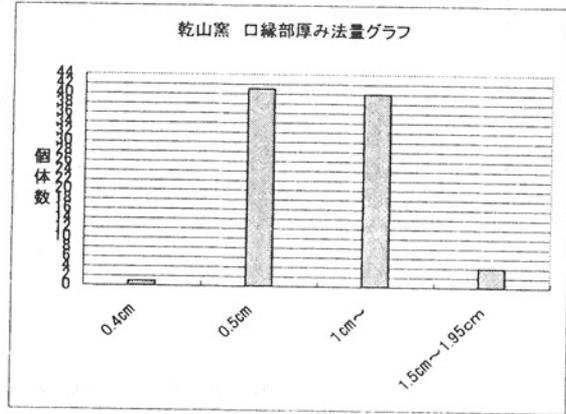
グラフ2



グラフ3

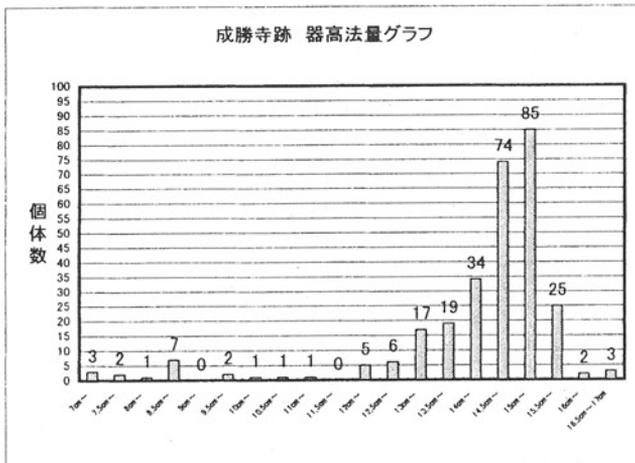


グラフ4

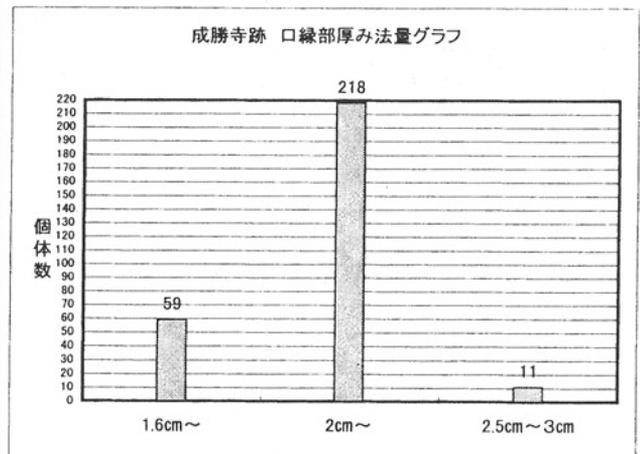


第8図. 鳴滝乾山窯出土匣鉢法量グラフ

グラフ1

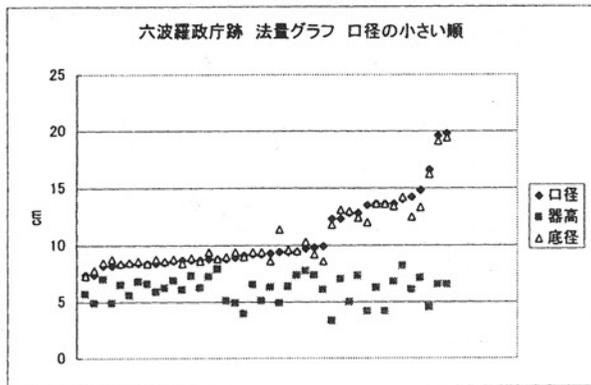


グラフ2

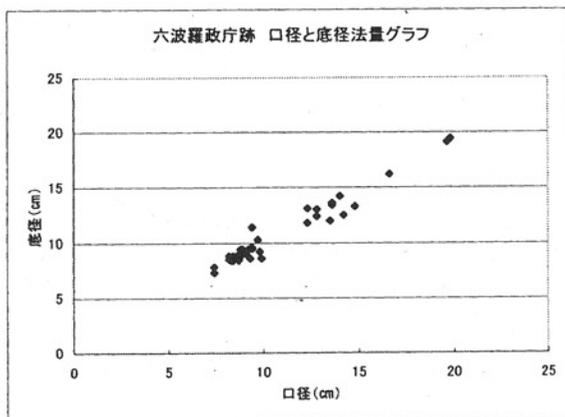


第9図. 成勝寺跡出土匣鉢法量グラフ

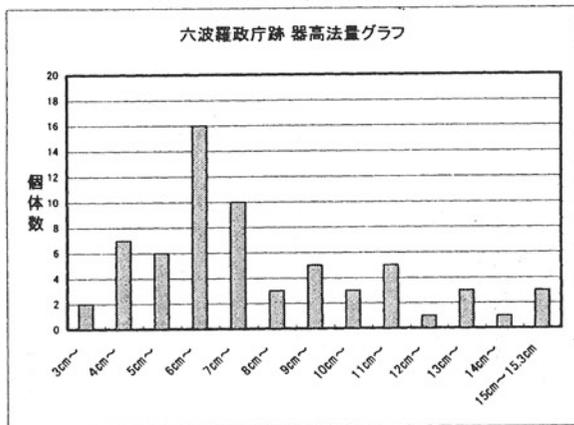
グラフ1



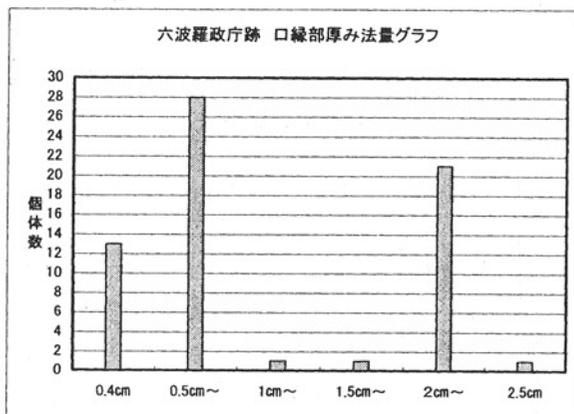
グラフ2



グラフ3



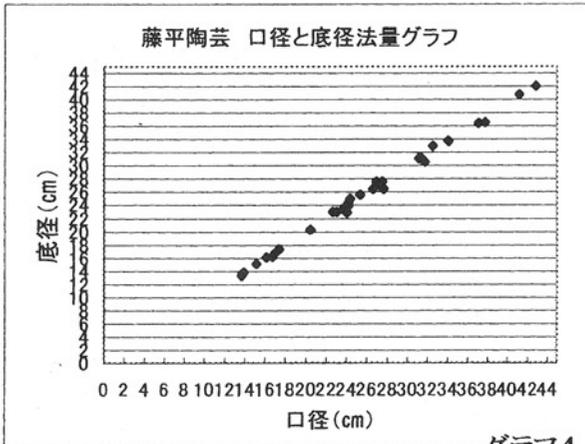
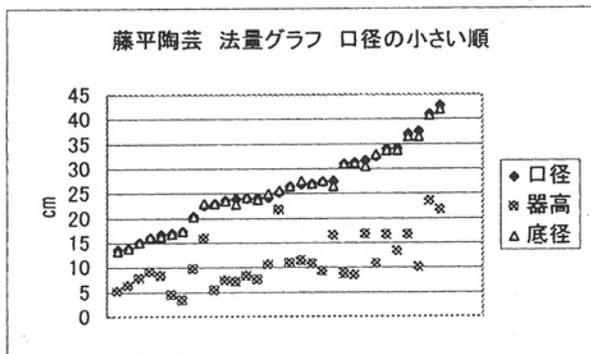
グラフ4



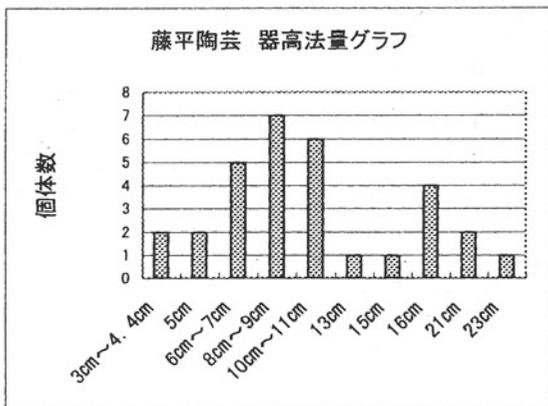
第10図. 六波羅政庁跡出土匣鉢法量グラフ

グラフ2

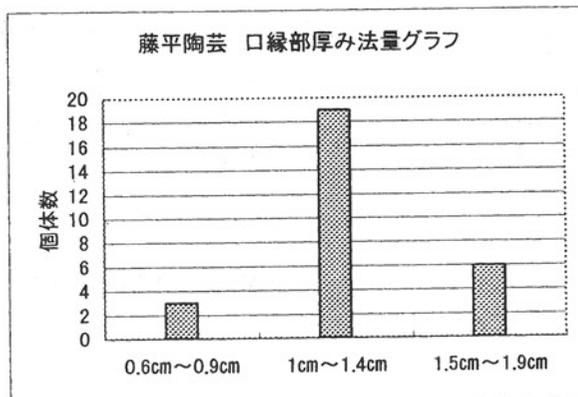
グラフ1



グラフ3



グラフ4



第11図. 藤平陶芸匣鉢法量グラフ

表 1

法蔵寺鳴滝乾山窯出土匣鉢

遺物No.	器高	口径	底径	口縁部厚	備考	遺物No.	器高	口径	底径
1	6.85	20.4	17.4	0.4	静止糸切・角取り	83			13.4
2	11.1	21.8	17.8	0.51	角取り	84			20.2
3	11.12	22.2	19.2	0.85	底部により土・角取り	85			12.6
4	6.8	16.1	19.3	0.5		86	5.71	17.44	18.4
5	7.35	13.8	14	0.9	角取り	87	6.95	20.6	23.8
6	5.52	20.2	19.6	1.1	静止糸切 (槽円か)	88			19.2
7	8.12	10.6	13.2	0.89	素焼き状・角取り	89			18.2
8	5.6	15.6	17.3	0.85	内面に釉薬流れる	90		17.6	
9	6.75	8.05	17.8	0.95	角取り	91			16.2
10	8.05	28	35.6	0.9	角取り	92			21.1
11	6.5	22.2	24.4	1.2		93		12.4	
12	5.58	18.4	19.1	1.2		94			19
13	6.25	21.6	21.4	1.11		95		12.4	
14	10.9	17.4	18	0.8	角取り	96			19.8
15	5.5	18.6	20	1.75		97		13	
16	6.41	12.8	17.7	0.95	角取り	98		9.96	
17	5.85	18.3	20.64	1.05	角取り	99		4.159	
18	6.98	17.4	17.4	1.1		100		15.6	
19	5.65	14.1	15.8	1.2		101	10.12	11.4	16.2
20		17.7	18	1.32	厚みのある自然釉	102		10.6	
21	6.65	22.6	19	1.3	角取り	103			19.9
22	6.03	19.8	20.7	0.96		104		15.2	
23	6.2	26.4	23.8	1.2		105		19.2	
24	6.18	16.8	16.5	1.1		106		15.6	
25	6.65	17.8	19.24	1	角取り	107		20.2	
26		13.02	16.6	0.8	角取り	108			18.1
27	8.12	12.7	12.8	0.85	糸切・角取り	109		18.4	
28	6.55	18.46	17.5	1.05		110			20.7
29	6.18	20.8	20.6	0.85	角取り	111	10.0~	17.6	16.5
30	6.48	17.52	14.4	0.95		112			19
31			20.1	0.83		113	9.0~	16.62	14.8
32		8.2	15.76	0.98		114			19.8
33	11.95	13.8	18.4	0.9	角取り	115			22.2
34	7.55	15.46	17.46	0.85	見込みに高台痕・角取り	116		20.8	
35	6.08	21.4	17.9	1.05	角取り	117		14.4	
36	6.08	20.6	21.4	1.2		118			16.6
37	8.52	17.5	19	1	角取り	119			18.4
38		18.6		0.93		120	9.0~	16.4	20.6
39	5.83	16.8	18.4	1	底部により土・口縁痕・角取	121	7	18.6	17.2
40	6.55	15.42	17.8	1.95		122	7.45	22.8	14
41	6.49	15.6	16.2	1.98	角取り	123	8.62	17.4	19.6
42	6.5	15	16.2	1	角取り	124	7.65	22.4	15.8
43	5.88	17.7	19.64	0.8	底部に釉薬	125	5.85	24	20.8
44	6.9	14.2	18.2	1.05	底部に蓋溶着・角取り	126		21.64	19.5
45	8.95	13.9	13.7	1	糸切・角取り	127			18.82
46	5.4	18	19	0.9		128	6~	22.4	22.4
47	5.42	12.4	13	1.21	口縁部、底部より土付着	129			19.8
48	5.7	16.6	13.2	0.8		130			17.3
49	5.35	20.3	19.1	0.98		131			13
50	6.05	20.2	22.76	1	糸切	132			18.4
51	6.3	16.2	16.5	1.2	内面に釉薬流れる	133			18.8
52					角型	134			16.44
53	6.65	20.3	19.2	1.21		135			19
54	5.51	16.56	18.8	1.18	底部内面高台痕	136			18.8
55	7.2	20.2	18.8	0.95	角取り	137	7~	13	
56		11.6	13	0.92	糸切	138		12.6	
57		19.02	16.6	1.12	糸切	139		18.6	
58		13.8	15	1.11	糸切・角取り	140		13.8	
59		14	16.84	0.9	底面に高台痕				
60			17.2	*1.18	角取り				
61		12.2	14.4	0.86	糸切・角取り				
62			20.8	*0.92					
63			17.7	*1.1	糸切・角取り				
64			14.4	*1.08	角取り				
65			13.8	*0.8					
66			12.1	1.8					
67			16.6	1.15	側面、粘土塊				
68			19.5	0.9					

第 12 図. 鳴滝乾山窯出土匣鉢法量表

表 2-1

成勝寺跡出土匣鉢									
遺物No.	器高	口縁部厚	袋No.	備考	遺物No.	器高	口縁部厚	袋No.	備考
1	11.35	1.9	282		76	15.2	2	214	口縁部白泥
2	15.3	2.1		口縁部穴あき	77	15	2		
3	14.9	2.1		「〇」印・口縁部白泥	78	14	1.8		
4	14.9	1.9			79	13.3	2.2		
5	14.45	2.1			80	13.5	2.5		
6	15	2.2			81	14.6	2.1	243	口縁部白泥
7	14.45	2.2			82	15.2	2.1		口縁部白泥
8	15	1.9	291		83	14.4	2.1		口縁部白泥・底部内面高台痕
9	13.7	2.3			84	14.2	1.9		口縁部穴あき
10	14	2.4		口縁部穴あき・白泥	85	13.7	2.1		口縁部白泥
11	13.7	2.2			86	14.8	2.2		口縁部白泥・穴あき
12	15	2.3			87	14.4	2.2		口縁部白泥・穴あき
13	13.45	2		底部に砂付着	88	14.2	2.3		口縁部白泥
14	15.05	2.3		口縁部白泥・穴あき・底部砂付着	89	14.85	1.9	290	底部内面高台痕
15	15.45	2	211	口縁部穴あき	90	14.8	2.2		口縁部白泥
16	14.5	2.3			91	14.85	1.8		口縁部白泥・穴あき・底内面高台痕
17	15	1.8		口縁部穴あき・白泥	92	15	2		口縁部白泥
18	15.35	2.2	231	口縁部穴あき・白泥・「一忠」印	93	13.65	2		口縁部白泥
19	15.1	1.9		「一忠」印・口縁部穴あき	94	14.7	1.8		口縁部白泥
20	14.5	2.25		口縁部穴あき	95	15	2.3		口縁部白泥・底部砂付着
21	13.05	2.1		口縁部穴あき・白泥・「」印	96	14.9	2		口縁部白泥
22	12.65	2		「」印	97	12.5	2	380	底部内面高台痕
23	15.25	2.2		口縁部穴あき・白泥	98	15.1	2.15		口縁部白泥・底部より土
24	15.3	2.5		口縁部白泥	99	14.8	2.3		底部内面高台痕
25	14.7	1.8		「平」(?)	100	14.25	2		底部砂付着
26	15.7	2.2		「〇〇」印口縁部穴あき・白泥	101	13.3	2	386	
27	15.1	2.6		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥	102	15	1.8		底部内面高台痕
28	14.6	2.1		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥	103	13	2.1		「」印・口縁部白泥・穴あき
29	15.95	2.2		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥	104	15.9	2.2		口縁部穴あき
30	15.95	2		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥	105	15.2	2.5		口縁部白泥
31	8.8	2.2	240	「いせ又」印口縁部穴あき・白泥	106	14.6	2.25		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
32	14.4	2.2		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥	107	15.2	2.15		「一」印・口縁部白泥・穴あき
33	14.8	2.2		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥	108	15.2	2.15		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
34	14.8	2.1		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥	109	14	2.05		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
35	13.9	2.1	235	底部砂付着・ひび割れ断面自然釉	110	15.4	2	398	口縁部白泥・穴あき
36	15.3	2.4		口縁部白泥・穴あき	111	14.5	2.2		口縁部白泥・穴あき
37	15.4	1.9		口縁部白泥・穴あき	112	15.5	2.25		口縁部白泥・穴あき
38	14.1	2.05		白泥・底部内面高台痕	113	15	2.2		口縁部穴あき・外面縄の痕
39	15.1	2.1		口縁部白泥	114	15.5	2		口縁部白泥・穴あき・縄の痕
40	15.5	1.7			115	14.5	2.2		口縁部白泥・穴あき
41	15.3	2		口縁部白泥	116	15.8	2		口縁部穴あき
42	8.5	2.1	278	口縁部白泥	117	14.3	1.9		口縁部穴あき
43	8.45	2.1		口縁部白泥	118	14.3	2.2	344	口縁部白泥・穴あき
44	14.8	2		口縁部白泥・穴あき	119	14.5	2		口縁部白泥・穴あき
45	15.05	2.2		口縁部白泥	120	14.7	2		口縁部白泥・穴あき
46	15.15	2.15		口縁部白泥・穴あき	121	7.3	2.1		
47	14.25	2.1		口縁部白泥	122	15.3	2.2	338	「一」印
48	14.1	1.7		口縁部白泥	123	15	2.35		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
49	15.4	2.3		口縁部白泥・穴あき	124	15.2	2		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
50	14.6	1.9		口縁部穴あき	125	15.3	2.1		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
51	15.75	2.1		口縁部白泥	126	13.35	1.75		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
52	14.1	1.9		口縁部より土	127	14.7	2.1		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
53	8.9	2.2	246	口縁部穴あき・白泥	128	8.8	2		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
54	14.85	2.05			129	8.8	2		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
55	15.45	1.9		口縁部穴あき・白泥	130	14.6	2.15	349	
56	15.2	2.2		口縁部白泥	131	14	2.3		底部内面高台痕
57	13.6	1.8		口縁部穴あき	132	14.8	2.1		底部内面高台痕
58	14.3	2	239	「いせ又」印・口縁部白泥・穴あき	133	13.45	2.1		
59	15.6	2		口縁部白泥	134	9.8	2.15		口縁部白泥
60	15.5	1.7		口縁部白泥・穴あき	135	15	2.1	339	「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
61	14.7	1.8			136	15.15	2.4		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
62	13.55	2	212	白泥・穴あき	137	14.8	2		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
63	13.25	2		口縁部白泥	138	15.1	2.15		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
64	14.2	2		口縁部白泥	139	15.3	2.1		「〇」印・口縁部白泥
65	14.75	2.1		口縁部白泥	140	15.2	2.1		口縁部白泥・穴あき
66	10	2.3		口縁部白泥	141	10.8	2		「◎」印
67	15	2.7		口縁部白泥	142	13.8	1.8	353	口縁部白泥
68	14.65	2		「いせ又」印・口縁部穴あき・白泥	143	13.1	2.3		口縁部白泥
69	15.55	2.2	257	口縁部白泥	144	15.5	2.4		口縁部白泥
70	15	2		口縁部白泥	145	14.4	2.2		口縁部白泥・縄の痕
71	15.4	2.2		口縁部白泥	146	15.65	2.2		口縁部白泥
72	15.5	2.1		口縁部白泥・穴あき	147	13.15	2.1		口縁部穴あき・縄の痕
73	14.6	2.1		口縁部白泥	148	14.35	2.35		「平」印・口縁部穴あき・白泥
74	13.3	2		口縁部白泥	149	7.5	2.05		縄の痕
75	15.6	2.1		口縁部白泥	150	14.75	2.3	391	「いせ又」印口縁部穴あき・白泥

第 13-1 図 成勝寺跡出土匣鉢法量表

遺物No.	器高	口縁部厚	袋No.	備考	遺物No.	器高	口縁部厚	袋No.	備考
151	14.9	2.35			226	15.2	2.1		口縁部・穴あき
152	15.85	2.7		「〇」印・口縁部穴あき・白泥	227	14.75	2.2		口縁部白泥・縄の痕
153	14	2.4		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥	228	15	2.1		口縁部・穴あき
154	15	2		底部内面(高台)製品付着	229	15.2	2.3		口縁部白泥
155	15	1.8			230	15.1	2		口縁部白泥
156	14.7	2.1		口縁部穴あき・白泥	231	15.4	1.7	459	底部外面砂
157	14.9	2.2			232	15.4	2.1		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
158	14.8	2.1			233	14.7	1.9		
159	14.6	2.2		口縁部穴あき・より土	234	15.1	1.9		
160	15.1	1.9	330		235	15	1.9		口縁部白泥
161	16.6	2			236	13.7	1.6		口縁部より土・匣鉢内製品付着
162	15.3	2.15		口縁部白泥	237	8.6	2	485	口縁部白泥
163	15.2	2.3			238	15.6	2	495	口縁部白泥・縄の痕
164	16.5	1.7		底部砂付着	239	15.7	1.9		口縁部白泥
165	7.3	2.1			240	14.8	2		口縁部白泥
166	14.8	2.2	323	口縁部白泥	241	14.1	2.1		口縁部・穴あき
167	9.7	2.1		口縁部白泥	242	13.2	2.8		口縁部白泥
168	14.2	2.25		口縁部白泥	243	12.2	2		口縁部白泥・穴あき
169	13.35	1.6		口縁部白泥	244	12.1	1.8		口縁部白泥
170	7.9	1.8	352	口縁部白泥	245	13.8	1.9		口縁部白泥・穴あき
171	14.8	2		口縁部白泥・穴あき・縄の痕	246	14.7	1.8	514	口縁部穴・底部内面高台痕・外面砂
172	15.2	2		口縁部穴あき・白泥	247	12.4	2.3		底部外面砂
173	14.8	2.1		口縁部穴あき・白泥	248	14.1	2		底部外面砂付着・口縁部厚穴あき
174	14.9	2		口縁部白泥	249	13.9	1.9		底部内面高台痕
175	13.8	2.5			250	14.5	2.15	510	
176	16.8	1.75	351	口縁部白泥	251	12.5	2.3		匣鉢2個体溶着
177	14.1	2.1		口縁部白泥	252	14.7	2		
178	13.5	2		口縁部白泥	253	15.2	1.6		
179	14.6	1.9		口縁部白泥	254	14	2.3		口縁部穴あき
180	12.8	2		匣鉢2個体溶着	255	14.7	2.2	527	「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
181	14.8	2.4		「いせ又」印・白泥	256	13.8	1.9		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
182	14.8	2.3		口縁部白泥	257	14.9	2		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
183	14.8	2.3		「いせ又」印・白泥	258	13.6	1.7		口縁部白泥
184	7.3	2.35	333	口縁部白泥	259	14.5	1.8		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
185	15.4	2.2		口縁部白泥	260	15	2.4		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
186	14.9	2.4		口縁部白泥・穴あき	261	14.8	2.4		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
187	13.45	2.1		口縁部白泥	262	14.6	2	502	底部より土
188	16.2	2.1		口縁部白泥	263	12.2	2.2		匣鉢2個体溶着
189	12.9	2.2		口縁部白泥	264	15	2		口縁部白泥
190	12.4	1.9			265	14.8	1.7		
191	14.9	2.15	437	口縁部穴あき・白泥	266	14.5	2	453	口縁部白泥・穴あき
192	15.2	2			267	14.5	2.5		
193	15.4	2.15		底部外面砂付着・口縁部白泥	268	15	1.8		口縁部白泥
194	15.4	2.05		口縁部白泥	269	15.9	2.4		口縁部白泥
195	16	1.8		口縁部白泥	270	15.1	2.3		口縁部白泥
196	15.25	1.9		口縁部白泥	271	14.8	2		口縁部白泥・穴あき
197	14.7	2.45		口縁部・穴あき	272	14.8	2		口縁部白泥
198	14.8	2.2		口縁部白泥	273	13.3	2.3		口縁部白泥・「」印
199	15.1	2.2	499	「いせ又」印口縁部穴あき・白泥	274	15	2.1	526	口縁部白泥
200	15.5	2.1		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥	275	15.2	2		
201	15.6	2.3		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥	276	12.7	2		口縁部より土・底部内面砂付着
202	15.2	2.2		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥	277	14.8	1.9		口縁部白泥
203	15.2	2.4		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥	278	8.7	2		口縁部白泥
204	14.3	2.1		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥	279	14.2	2		口縁部白泥
205	15.2	2.2		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥	280	14.5	2.25		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
206	15	2.5		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥	281	15	2.2		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
207	15.5	2.1		「〇」印・口縁部白泥・穴あき	282	14.1	1.7	500	
208	13.25	2.3		口縁部白泥・穴開・底部外砂付着	283	15.5	2.5		口縁部白泥
209	15.5	2.05	459	口縁部・穴あき	284	14.5	2.2		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥
210	14.7	2		「いせ又」口縁部白泥・縄の痕	285	14.2	1.7		口縁部穴あき
211	14.95	2.2			286	14.5	2		口縁部白泥
212	13.25	2.2		底部外面砂付着	287	14.1	1.8		口縁部穴あき・底部内面高台痕
213	13.7	2.1		底部外面砂付着	288	15	2.2		口縁部白泥
214	14.3	2.4			289	3	0.6		中央穴あき
215	13.9	2.2			290	3.9	0.5		中央部穴あき
216	15.4	1.7			291	2.7	0.6		中央部穴あき
217	15.1	2.1	473	匣鉢2個体溶着	292	5	0.7		中央部穴あき
218	14.7	2.3		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥	293	5.6	0.8		中央部穴あき
219	15.3	1.9		口縁部穴あき	294	5.6	0.7	391	「いせ又」
220	14.6	1.9		「いせ又」印・口縁部穴あき・白泥	295	5.85	0.65	240	中央部穴あき
221	15	1.8		口縁部穴あき	296	4.35	0.8		中央部穴あき・糸切り痕
222	15	2.1	494	口縁部白泥	297	4.55	0.7		中央部穴あき・糸切り痕
223	13.6	2.25		口縁部白泥	298	5.4	0.9		中央部・口縁部穴あき・底部より土
224	15	2.1		「いせ又」印口縁部穴あき・白泥	299	5.2	0.8	235	中央部穴あき・糸切り痕
225	15.4	1.9		口縁部・穴あき					

第13-2 図 成勝寺跡出土匣鉢法量表

表3

六波羅政庁跡出土匣鉢

遺物No.	器高	口径	底径	口縁部厚	袋No.	備考
1	7.35	9.8	9.2	0.4	OORT-aa5-15b	底部外面口縁痕
2	6.85	8.6	8.8	0.6		
3	5.6	8.4	8.5	0.4		
4	3.3	12.3	11.8	0.6		底部外面口縁痕
5	8.2	14	14.2	0.65		
6	5.7	7.4	7.3	0.4		
7	6.25	13.6	13.6	0.6		底部内面・白泥
8	6.5	8.3	8.4	0.4		
9	7	8.2	8.5	0.4		
10	6.5	9.2	9.4	0.6		糸切り痕
11	4.9	9.4	11.4	0.4		
12	4.5	16.6	16.2	0.6		
13	5	12.8	13	0.6		底部より土
14	6.55	19.8	19.4	1		底部内面白泥・口縁部穴あき
15	4.9	7.4	7.8	0.5		不明窯印・底部内面白泥
16	7.25	8.8	9.4	0.4		
17	4.15	13.6	13.6	0.8		
18	3.95	9.1	9	0.6		
19	6.1	8.7	8.4	0.4		底部外面より土・内面白泥
20	6.35	9.4	9.6	0.5		糸切り痕
21	6.25	8.5	8.6	0.5		糸切り痕
22	4.15	13.5	12	0.7		「へ」印
23	6.8	13.6	13.4	0.7		
24	7.1	14.8	13.3	0.7		糸切り痕・不明窯印
25	7.9	8.8	8.82	0.45		
26	4.9	8.2	8.8	0.5		鉄軸文字「力」
27	7.3	12.8	12.4	0.5		
28	7.75	9.7	10.3	0.5		
29	6.8	8.4	8.6	0.4		
30	7.3	8.7	8.9	0.5		
31	7.35	9.4	9.5	0.6		
32	6.6	8.4	8.4	0.4		
33	6.1	9.9	8.6	0.6	OORT-aa5-18b	匣鉢内製品・窯印
34	5.1	9.2	9.4	0.5		「仁」印
35	6.25	8.7	8.6	0.5		
36	6.3	9.3	8.6	0.5		
37	5.9	8.4	8.8	0.4		
38	4.9	8.9	9.4	0.4		底部突出型・布目痕
39	5.1	8.8	9	0.5		底部突出型
40	6.1	14.2	12.5	0.6		
41	7	12.3	13.1	0.6		
42	6.55	19.6	19.1	0.7		
43	10		3.2	2	OORT-AA5-22	角型
44	9		3.4	2.05		角型
45	8.8		2.5	2.25		角型
46	12.2		2.7	2.3		
47	13.6		2.1	2.3		
48	11.1		2.9	2.4		
49	15.2		1.7	2.35		
50	13.9		2.3	2		
51	11.3		3.6	2.5	OORT-AA5-21	角型
52	9.2		2.4	2.3		角型
53	11.9		2.6	2.4		角型
54	9.7		3	2		角型
55	9		2	2		角型
56	10.8		3.3	2.4	OORT-AA5-20	角型
57	14.7		3.2	2.3		
58	15.3		2	2.3		
59	13.8		2.9	2		角型
60	11		2.8	1.9		角型
61	11.5		2.65	2.2	OORT-AA5-18	角型
62	8.4		2.4	2.25		角型
63	15.1		2.8	2.3		角型
64	9.6		2.4	2.1		角型
65	10.8		3	2.3	OORT-AA5-16	

表4

藤平陶芸匣鉢

	口径	器高	底径	口縁部厚み
1	16.7	8.25	16.3	1
2	13.9	6.3	13.9	1.9
3	16.1	9.1	16.15	1.9
4	20.45	9.7	20.35	1.4
5	24	7.1	22.9	1.3
6	13.7	5.2	13.35	0.9
7	17.4	3.35	17.4	1.2
8	17	4.4	16.9	1
9	15.15	7.8	15.2	0.8
10	27.1	10.75	27.1	1.1
11	27.5	9.2	27.6	0.6
12	24.1	8.35	24.3	1.2
13	34	16.65	33.8	1.6
14	42.8	21.7	42.1	1.7
15	37.1	16.6	36.5	1.1
16	41.15	23.4	40.8	1.2
17	32.5	10.7	33	1.5
18	37.7	10	36.6	1.7
19	31.3	8.4	31.2	1.6
20	23	5.4	23	1.1
21	31.7	16.8	30.6	1.5
22	24.1	7.5	23.9	1.3
23	26.55	10.8	26.5	1
24	31.1	8.7	31.1	1.4
25	25.3	21.65	25.65	1.4
26	26.9	11.45	27.6	1.1
27	24.3	10.6	25	1.3
28	22.6	15.95	23	1.3
29	27.65	16.5	26.5	1.1
30	34.1	13.2	33.7	1.6
31	23.7	7.4	23.6	1

第14図. 六波羅政庁跡出土匣鉢法量表及び藤平陶芸匣鉢法量表

(参考引用文献)

- 九州近世陶磁学会2005『16. 17世紀における九州陶磁器をめぐる技術交流』
 瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告書第22集2000『瓶子窯跡』瀬戸市埋蔵文化財センター
 瀬戸市史編纂委員会1981『瀬戸市史2』
 瀬戸市史編纂委員会1993『瀬戸市史4』
 瀬戸市史編纂委員会1993『瀬戸市史5』
 瀬戸市史編纂委員会2000『瀬戸市史6』
 多治見市教育委員会1987『尼ヶ根古窯跡群発掘調査報告書』
 NHK/NHKプロモーション1999『尾形乾山開窯三〇〇年・京焼の系譜「乾山と京のやきもの展」』
 関西近世陶磁史研究会2005『窯構造・窯道具からみた窯業—関西窯業の技術的系譜をさぐる』
 田中利津子2003『六波羅政庁跡』『京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
 藤岡幸二1962『京都陶磁器説京都陶磁器説図』『京焼百年の歩み』財団法人京都陶磁器協会
 藤平長一・北沢恒彦1982『五条坂陶工物語』晶文社
 網伸也1995『成勝寺跡』『京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所